

松山大学論集
第二十六卷第五号抜刷
平成二十六年十二月発行

『外交時報』総目次―戦後編(四)

——一九七七年一月第一一四一号—一九八九年二月第一二六三号——

伊藤 濱
藤岡 鷹
信哉 行

『外交時報』総目次―戦後編(四)

——一九七七年一月第一一四一号―一九八九年二月第一二六三号——

伊藤信哉
浜岡鷹行

第一一四一号 一九七七年一月号

巻頭言 アメリカとソ連の外交のちがい〔三好貞雄〕	二―三
米大統領選挙とカーター新政権について〔藪中三十二〕	四―一〇
人種主義問題と国連の解体〔ポール・ジョンソン〕	一―一五
アフリカの“ハードコア” 発展途上国の問題と政策〔Y・Z・キエシミラ（菅野亮子訳）〕	一六―二三
国際連盟の対イタリア経済制裁（一）―イタリア・エチオピア戦争における〔海野芳郎〕	二四―三一
ポーツマス講和条約の元型はイエール大学で生まれた（三）〔松村正義〕	三二―三五
中央アジア紀行（一）―西トルキスタンを中心に〔長山義男〕	三六―四一

第一一四二号 一九七七年二月号

巻頭言 革命は手段で目的は民生の向上〔田村幸策〕

華国鋒体制と十大関係論〔土井章〕

国際連盟の対イタリア経済制裁（二）―イタリア・エチオピア戦争における〔海野芳郎〕

ポーツマス講和条約の元型はイエール大学で生まれた（四）〔松村正義〕

中央アジア紀行（二）―西トルキスタンを中心に〔長山義男〕

第一一四三号 一九七七年三月号

巻頭言 人権外交の行方〔三好貞雄〕

中ソ和解の可能性と限界〔竹中重寿〕

ワルシャワ条約統合軍総司令官とソ連軍参謀総長の交代〔完倉寿郎〕

国際連盟の対イタリア経済制裁（三）〔海野芳郎〕

グリーンランド旅行記〔大和田渉〕

中央アジア紀行（三）―西トルキスタンを中心に〔長山義男〕

第一一四四号 一九七七年四月・五月合併号

巻頭言 マンスフィールド新駐日大使を迎えて日本のアジア復興の使命を思う〔三好貞雄〕

試練に立つ経済外交―日ソ漁業交渉の経緯に見る〔牧内正男〕

正念場を迎えた華国鋒政権〔藤井彰治〕

二一四

五一九

一〇一六

一七一二三

二四一三二

二一四

五一九

一〇一六

一七一二三

二四一三七

三八一四三

二一四

五一九

一〇一六

サー・アーネスト・サトウ〔川崎晴朗〕

国際連盟の対イタリヤ経済制裁（四）〔海野芳郎〕

中央アジア紀行（四）―西トルキスタンを中心に〔長山義男〕

第一一四五号 一九七七年六月号（日ソ関係特集号―領土問題と漁業交渉）

巻頭言 領土回復百年戦争の展開〔三好貞雄〕

われわれの北方領土〔外務省情報文化局編〕

ポリヤンスキー大使閣下に訴える

―スターリン・フルシチョフ時代にならって平和条約の締結を推進されたい〔田村幸策〕

世界史上における日露関係の考察〔神川彦松〕

ソ連の世界政治戦略と日・ソ関係〔甲谷悦雄〕

日ソ漁業交渉をふりかえって〔尾上正男〕

日ソ漁業交渉と領土問題〔牧内正男〕

中ソ対決の再燃と日本〔上別府親志〕

第一一四六号 一九七七年七月・八月合併号

巻頭言「アジア国家連合」への一歩前進を〔三好貞雄〕

わが国の対ASEAN外交

―米国の肩代りという考え方はアナクロニズムである〔西山健彦〕

一七―二四

二五―二九

三〇―三三

二―五

六―八

九―一四

一五―二一

二二―二九

三〇―三三

三四―三五

三六―四三

二―二

三一―八

日本をとりまく二つの関係、漢字圏とASEAN〔千種光夫〕

「毛沢東選集」第五卷の研究（二）〔上別府親志〕

第一三回パレスチナ民族評議会（PNC）―新綱領の詳細と分析〔Y・ハルカビ〕

中央アジア紀行（五）―西トルキスタンを中心に〔長山義男〕

第一一四七号 一九七七年九月号

巻頭言 日本の東南亜外交三原則〔三好貞雄〕

遠のいたジュネーブ和平会議再開とアフリカの角の紛糾〔岩永博〕

デタント戦略にみられるアメリカの弱さとソ連の強さ〔落合忠士〕

「毛沢東選集」第五卷の研究（二）〔上別府親志〕

明治中期における外交文書公開の建議〔安岡昭男〕

中央アジア紀行（六）―西トルキスタンを中心に〔長山義男〕

第一一四八号 一九七七年一〇月号

巻頭言 日中平和友好条約締結の機熟す〔三好貞雄〕

福田総理の東南アジア歴訪

―その意義と今後の課題そして舞台裏での一つの感慨〔西山健彦〕

ハノイ雑感〔長谷川孝昭〕

「毛沢東選集」第五卷の研究（三）〔上別府親志〕

九―一三

一四―二二

二三―三〇

三一―三四

二―四

五―一〇

一一―一七

一八―二六

二七―三〇

三一―三四

二―二

三―一〇

一一―一三

一四―二三

アダム・スミス二百年祭にさいして、古典経済のゆらいを偲ぶと共に
 ーケーンズ学説によりこの不景気を免れうるや否や？〔帆足計〕

二四―三二

第一二四九号 一九七七年一月号

卷頭言 日・米・韓、力の平衡状態〔三好貞雄〕

二一―三

華国鋒体制と毛沢東思想の総合化〔土井章〕

四―一〇

ソ連のアフリカ政策の明暗〔竹中重寿〕

一一―一四

敗戦外交〔鈴木孝〕

一五―二五

〔毛沢東選集〕第五卷の研究〔四〕〔上別府親志〕

二六―三三

第一二五〇号 一九七七年二月号

卷頭言 凜乎たる態度を以て臨め〔三好貞雄〕

二一―五

サダト大統領のイスラエル訪問〔岩永博〕

六一―一

続・敗戦外交〔鈴木孝〕

二二―二〇

現段階の中国の直面する基本的危機〔鄭竹園（藤井彰治訳）〕

二二―二六

〔毛沢東選集〕第五卷の研究〔五〕〔上別府親志〕

二七―三四

第一二五一号 一九七八年一月号（日米関係特集号）

卷頭言 日本は牽引車の役目を敢遂せよ〔三好貞雄〕

二一―三

座談会「世界経済の中の日本外交―「日本経済開放」へ国際的要求

〔永田農・山本和郎・土田寿太郎〕

日米経済関係の諸問題〔那須聖〕

四一―一八
一九―三一

第一一五二号 一九七八年二月号（続・日米関係特集号）

巻頭言「紛争の根底には何があるか」〔三好貞雄〕

二―二

戦後日米関係の回顧―八人の駐日アメリカ大使を中心として〔池井優〕

三一―七

日米関係に思う〔下田武三〕

八一―三

日米経済関係資料（二）牛場大使とストラウス大使との共同声明（一九七八年二月二三日）

一四―一六

日米経済関係資料（二）一九七七年一月及び一―一―一月の日米貿易

一七―二九

外交時報と私（一）〔田村幸策〕

三〇―三二

第一一五三号 一九七八年三月号

巻頭言『防衛論議』とは？〔三好貞雄〕

二―三

インドネシアの情勢と日伊関係〔土井章〕

四―八

逆通商破壊戦と海上自衛隊の任務〔近藤眞男〕

九―一三

ウイーンの王宮に住んだ話〔藤山樽一〕

一四―一五

〔毛沢東選集〕第五卷の研究（六）〔上別府親志〕

一六―二四

外交時報と私（二）〔牧内正男〕

二五―二六

第一一五四号 一九七八年四・五月合併号

巻頭言 日本にとって「軍縮外交」とは何か―外務省に軍縮本部を設置せよ〔三好貞雄〕

二一三

座談会 日本軍縮外交の行方

―国連特別総会を迎えて〔渡辺陽一・岸田純之助・佐藤栄一・前田寿〕

四一二八

資料

軍縮特別総会についての日本政府見解（一九七七年四月一五日）

二九一三〇

通常兵器の国際移転、地域レベルの通常軍備と軍事力の相互規制を含む通常軍備競争の

抑制に関する提案

（一九七七年一月二三日付で軍縮特別総会準備委に提出した作業文書）

三一―三二

軍縮委員会夏会期における「核不拡散」に関する小木曾大使演説（一九七七年八月一日）

三三―三九

軍縮委員会における小木曾代表の包括的核実験禁止問題に関する演説

（一九七八年三月二日）

四〇―四三

第一一五五号 一九七八年六月号

巻頭言 尖閣列島問題と北京政権〔三好貞雄〕

二一八

中ソ関係三〇年の起伏を展望（上）

―一九六〇年が決裂の分水嶺、鄧小平のモスクワ演説が烽火〔田村幸策〕

九一―七

大正末期より昭和六年に至る日中交流名画展開催に関する渡辺晨畝画伯の活躍について

〔河村一夫〕

一八一―二九

外交時報と私 (三)〔神川彦松〕

三〇―三三

第一一五六号 一九七八年七月号

卷頭言 時・艱にして哲人政治家を思う〔三好貞雄〕

二一七

座談会「中東和平」の停滞を分析する―解決、米ソ宣言の線で〔岩永博・笹川正博・菊地弘〕

八一―三二

第一一五七号 一九七八年八・九月合併号

卷頭言 日中条約のあとに来るもの〔三好貞雄〕

二―三

対談 日韓大陸だな開発問題の経緯と今後〔中江要介・葦沢嘉雄〕

四―一二

中ソ関係三〇年の起伏を展望 (下)

―一九六〇年が決裂の分水嶺、鄧小平のモスクワ演説が烽火〔田村幸策〕

一三―二五

核武装と政治〔近藤真男〕

二六―二九

外交時報と私 (四)〔田中直吉〕

三〇―三一

第一一五八号 一九七八年一〇月号

卷頭言 国家の興亡と憲法〔三好貞雄〕

二―二

日中条約とソ連の対応〔尾上正男〕

三一―七

日中平和友好条約と総合外交の展開〔土井章〕

八一―一四

日中条約締結と今後の対ソ外交〔竹中重寿〕

一五―一八

- 文化大革命後の中国外交の現実とマンスフィールド米大使のアジア政策〔帆足計〕 一九一三七
 中ソのアジア共産集団における闘争〔尹慶耀（藤井彰治訳）〕 二八―四〇

第一二五九号 一九七八年一一・一二月合併号

- 巻頭言 世界をゆるがす三条約〔三好貞雄〕 二―三
 錯綜を加える中東情勢〔岩永博〕 四―一一
 ヤルタ協定と日本領土の占領〔田村幸策〕 一二―三三

第一二六〇号 一九七九年一月号

- 巻頭言 一九七九年初頭の世界情勢〔三好貞雄〕 二―三
 対談 新時代の幕明け・アジア外交を語る―安定と平和へ日本の力を〔西山健彦・林理介〕 四―三二
 緊張か、安定か七九年のアジア〔林理介〕 三三―四〇

第一二六一号 一九七九年二月号

- 巻頭言 ソ連包囲網の形成―鄧小平の訪米をめぐって 二―四
 中国の国内建設と外交政策の対応〔落合忠士〕 五―一九
 米・中国交樹立とその国際的影響〔甲谷悦雄〕 二〇―二六
 書評 大野勝巳著『霞が関外交、その伝統と人々』〔武内文彬〕 二七―二九

第一一六二号 一九七九年三月号

巻頭言 社会主義国同志の戦争―マルクスの共産主義「幽霊」論

ソ連の対外政策と千島基地化の背景〔竹中重寿〕

千島（クリルアイランズ）及び北方四島（歯舞・色丹・国後・択捉）並びに樺太は

日本固有の領土である〔西鶴定嘉〕

外交時報と私（五）〔譚覚真〕

七―二五
二六―三二

第一一六三号 一九七九年四・五月合併号

巻頭言 日中条約の価値判断（一）

―日中条約は中越戦争の根源だとする「日中条約万悪論」の妄を断ず

エジプト・イスラエル平和条約の波紋〔岩永博〕

二―三
四―九

対談 サミットの源流を語る―第一回先進国首脳会議の思い出とフランスの現情と

ECを解剖する〔北原秀雄・葦沢嘉雄〕

一〇―二六

外交時報と私（六）米内山領事の筆禍事件〔長山義男〕

二七―三一

第一一六四号 一九七九年六月号

巻頭言 日中条約の価値判断（二）

多様化社会での内政と外交―政治家と哲学の問題〔土井章〕

二―三
四―八

その後の中越紛争とこれをめぐる国際情勢〔牧内正男〕

九―一一

ソ連軍増強説批判(上)〔佐藤三郎〕
 二二―一八

中国は近代化、西向けの道から引返さない〔曹瑛煥(福井希行訳)〕
 一九―二七

第一一六五号 一九七九年七月号

巻頭言 日中条約の価値判断(完) 二―一八

米ソ間の第二次戦略兵器制限交渉(SALT II)の妥結について〔中司崇〕
 九―一九

ソ連軍増強説批判(下)〔佐藤三郎〕
 二〇―二八

第一一六六号 一九七九年八月号

巻頭言 東京サミットと南北問題 二―一四

UNCTAD特集

第五回国連貿易開発会議を顧みて〔寺田輝介〕
 五―一〇

参考資料

第五回UNCTAD議題 一〇―一一

UNCTAD早わかり 一一―一二

第五回UNCTADにおける大平総理の一般演説(一九七九年五月一〇日) 一三―一七

G77アルーシア閣僚会議採択文書 一八―二四

平和のプロセス〔アハロン・ヤーリヴ〕
 二五―二九

第一二六七号 一九七九年九月号

卷頭言 外務省機構拡充の要

二一四

宮崎外務審議官 東京サミットの急所を語る

五一一六

― 長期的ヴィジョンに立った国際協力、東京サミットの世界〔宮崎弘道〕

華鄧体制安全操業のかなめ―「四個現代化」革命の名分〔落合忠士〕

一七一二六

外交時報と私（七）その精神は創刊の辞に〔池井優〕

二七一二八

第一二六八号 一九七九年一〇・一一月号

卷頭言「非武装中立」の迷妄―社会党の惨敗を衝く

二一三

対談 八〇年代に臨む外交体制〔山崎敏夫・葦沢嘉雄〕

四一〇

中国の四つの現代化と民主集中制〔上別府親志〕

一一一七

台湾における「民主主義」の実践〔蕭行易〔藤井彰治訳〕〕

一八一二五

外交時報と私（八）―読者として〔八藤雄一〕

二六一二七

第一二六九号 一九七九年一二月号

卷頭言 火口原・中東〔三好貞雄〕

二一二

第三次国連海洋法会議第八会期―その概要と今後の見通し〔井口武夫〕

三一三

第三回国連総会 園田大臣演説（一九七九年九月二五日）

一四一二一

第三回国連総会 第一委員会における大川大使演説（一九七九年一〇月一九日）

二二一二六

書評 田中正明著『雷帝 東方より来る』〔三好生〕

二七―二八

第一一七〇号 一九八〇年一月号

巻頭言 イランとカンボジアと外交時報〔三好貞雄〕

二―三

年頭所感〔大来佐武郎〕

四―四

八〇年代の世界とアジア・太平洋―多元的世界の危機的構造〔林理介〕

五―一五

カンボジアをめぐる諸問題〔牧内正男〕

一六―一九

孫文の日中和平の大義と汪兆銘〔田中正明〕

二〇―三〇

第一一七一号 一九八〇年二月号

巻頭言 ソ連のアフガン侵入とカーター・ドクトリン〔三好貞雄〕

二―四

一九八〇年代の日本外交〔太田博〕

五―一四

一九七九年末頃の中・ソの動きを繞つて〔甲谷悦雄〕

一五―二一

核兵器不拡散―この古くて新しい問題〔矢田部厚彦〕

二二―三一

核に関する国際重要年表

三二―三四

第一一七二号 一九八〇年三月号

巻頭言 ことの始まりか、ことの終りかアフガニスタン侵略問題〔三好貞雄〕

二―三

「太平洋の世紀」は訪れるか？―環太平洋連帯構想の形成過程〔堂乃脇光朗〕

四―一四

アフガニスタン侵略とソ連軍の立場〔佐藤三郎〕
 イラン、アフガニスタンの動乱、その中東状況に及ぼす波紋〔岩永博〕

一五―二一
 二二―三〇

第一一七三号 一九八〇年四・五月合併号

巻頭言 日本外交の自主の姿〔三好貞雄〕

二―三

インドシナ難民問題と日本〔天野之弥〕

四―一

資料 インドシナ難民に対するわが国の協力〔東南アジア難民問題対策室〕

二―一三

南北対話の問題点〔金三奎〕

一四―一七

劉少奇の復権と毛沢東権威の凋落〔落合忠士〕

一八―二六

インド独立の志士プラタップ翁を憶う〔田中正明〕

二七―二八

第一一七四号 一九八〇年六月号

巻頭言 進んで米・イの仲裁国たるべし〔三好貞雄〕

二―二

八〇年代の安保・防衛問題を考える〔米田博信〕

三―一

「日本はこれでよいのか」―極東ソ連軍の増強を見て〔竹中重寿〕

二―一五

八全体制復活と文革否定の間〔上別府親志〕

一六―二三

第二次大戦とは結局何であったのか？〔近藤真男〕

二四―三〇

第一一七五号 一九八〇年七月号

巻頭言 ヴェネチア・サミットの政治宣言〔三好貞雄〕

二一三

最近の中近東情勢理解のために〔木村光一〕

四一一

サミットとアフガニスタン問題〔牧内正男〕

二二一―二四

中国の経済管理体制の改革とその問題点〔土井章〕

一五―二〇

中国の反覇外交と対ソ軌道修正〔藤井彰治〕

二一―二七

第一一七六号 一九八〇年八月号

巻頭言 難民・民族移動時代〔三好貞雄〕

二一二

ヴェネチア・サミットを終えて―菊地清明外務審議官に聞く〔菊地清明〕

三一―二

ヴェネチア・サミット諸宣言

一三一―二〇

ヴェニス・サミット宣言〔経済宣言〕

同上 政治問題〔政治宣言〕

難民に関する声明

外交官人質問題に関する声明

ハイジャックに関する声明

ヴェニス・サミットに関する報告について

最近のソ連軍事情〔佐藤三郎〕

二二―二八

第一一七七号 一九八〇年九月号

巻頭言 ポーランドの反抗・自由の獲得〔三好貞雄〕

二一三

南北問題特集

国連南北交渉ラウンド―南北問題の新展開〔寺田輝介〕

四一三二

資料

一一一三三二

G Nに関するG 77決議案〔英文〕

国連総会決議（三四／一三八）（G Nに関する決議・英文）

国連総会決議（三四／一三九）（G Nに関する諸提案・英文）

G 77閣僚会議コミュニケ〔英文〕

対立する中ソの最近の情勢〔甲谷悦雄〕

三三―三八

第一一七八号 一九八〇年一〇・一一月合併号

巻頭言 不合理極まるソ連の主張（上）〔三好貞雄〕

二一四

神格化毛沢東の相対化〔落合忠士〕

五一―五

南北朝鮮の動き〔金三奎〕

一六一―二〇

領事事務についての親切倍增計画〔外務省発表〕

二一―二三

中国における政治変動（一）〔浜田泰弘〕

二四―三二

第一二七九号 一九八〇年二月号

- 卷頭言 不合理極まるソ連の主張（下）〔三好貞雄〕 二一三
- 鼎談 防衛問題、縦横談―春日一幸氏を囲んで〔春日一幸・上野直明・尾脇準一郎〕 四一―一八
- イラン・イラク戦争の衝撃〔岩永博〕 一九―二五
- 中国における政治変動（二）〔浜田泰弘〕 二六―三二

第一二八〇号 一九八一年一月号

- 卷頭言 レーガン政権の外交政策〔三好貞雄〕 二一―二
- 年頭所感〔伊藤正義〕 三―三
- 国際社会と日本、その展望〔内田勝久〕 四―一五
- ポーランドの教訓―三度目の正直はあるか〔落合忠士〕 一六―二七
- 中国の現状認識と軌道修正の枠組み〔上別府親志〕 二八―三五

第一二八一号 一九八一年二月号

- 卷頭言 外交の継続性―レーガン新米大統領と鈴木首相の場合〔三好貞雄〕 二―三
- 八一年の国際情勢を解剖する―天羽外務省情報文化局長にきく〔天羽民雄〕 四―一二
- 「一枚岩」伝説崩壊へ〔牧内正男〕 一三―一六
- 世界の危機とわれわれの希望〔陶希聖〔藤井彰治訳〕〕 一七―二二
- 中国における政治変動（三）〔浜田泰弘〕 二三―三〇

第一一八二号 一九八一年三・四月合併号

巻頭言 限界の見えたソ連国力〔三好貞雄〕

二一二

ソ連邦の立場とソ連軍〔佐藤三郎〕

三一―二

八全体制を揺がす毛沢東の亡霊〔上別府親志〕

一三一―二〇

研究余滴 金子堅太郎のアトルボロ―貴金属産業見学記〔松村正義〕

二一―二五

中国における政治変動（四）〔浜田泰弘〕

二六―三二

第一一八三号 一九八一年五月号

巻頭言 ソ連東欧社会主義体制崩壊の一步手前か〔三好貞雄〕

二一三

アラビア湾岸諸国の動向と米国の対中東政策〔岩永博〕

四一―〇

ソ連の新たな平和攻勢の実態〔落合忠士〕

一一―二四

中国の政治変動（五）〔浜田泰弘〕

二五―三一

第一一八四号 一九八一年六月号

巻頭言 日米会談、日米同盟と核持ち込み〔三好貞雄〕

二一三

南北対話の進展と停滞―南北サミットとGNに見る〔内田富夫〕

四一―〇

アラブ・イスラエルのミリタリ・バランス（上）〔エホシユア・ラヴィヴ（滝川義人訳）〕

一一―二〇

中国統一問題の主導権掌握へ―国民党第一二回党大会からみる台湾の情勢〔藤井彰治〕

二一―二七

日英博覧会への元老井上馨の貢献〔河村一夫〕

二八―三二

第一一八五号 一九八一年七月号

巻頭言『核アレルギー』という自虐語

ソ連の脅威を前に実態なき防衛論議を憂える〔田中正明〕

アラブ・イスラエルのミリタリ・バランス（下）〔エホシユア・ラヴィヴ（滝川義人訳）〕

日本に來た最初のアメリカ黑人〔松村正義〕

中国の政治變動（六）〔浜田泰弘〕

第一一八六号 一九八一年八月号

巻頭言 対ソ政治会談のとき日本はどうする〔三好貞雄〕

国際シンポジウム「アジアは日本に何を期待するか」

―世界平和教授アカデミー創立七周年記念〔世界平和教授アカデミー〕

日本とE.C.の關係―その可能性と問題点〔レズリー・フィールディング〕

中国の政治變動（七）〔浜田泰弘〕

第一一八七号 一九八一年九月号

特集「核」に関するアンケート

〔浅野祐吾・安部博純・麻田貞雄・藤井彰治・藤井昇三・具島兼三郎・林三郎・花井等・

法眼晋作・堀内雄四郎・八藤雄一・平井友義・畑田重夫・帆足計・今村武雄・井上茂信・

伊手健一・今井勝郎・伊藤皓文・岩村博文・池上巖・公文俊平・上條末夫・小森義峯・

二一三

四一八

九一七

一八一六

二七一三

二一二

三一七

一八一五

二六一三

- 金山政英・久住忠男・蔵居良造・上別府親志・片岡鉄哉・栗本弘・桑原寿二・気賀健三・
 近藤新治・甲谷悦雄・黒木晩石・近藤真男・粕谷進・近藤嘉昭・栗野鳳・加藤元三・
 加茂雄三・勝部元・近藤秀樹・神川正彦・小平修・三瀧信吾・三好修・松本馨・牧内正男・
 三岡健次郎・松本明重・武藤貞一・村上薫・増子正通・宮崎繁樹・元川房三・三浦徹明・
 三橋利光・森松俊夫・三智の会・中川八洋・野村実・長山義男・中屋健一・西鶴定嘉・
 中川融・西原正・西本忠治・能戸英三・野々村一雄・難波田春夫・永井周・西原森茂・
 中山治一・中村光・大平善梧・落合忠士・尾上正男・小山内高行・岡本幸治・大石泰彦・
 奥村大作・大島康正・太田弘毅・大塚忠実・大畑篤四郎・関寛治・太田一男・小野修・
 太田雅夫・大橋隆憲・小幡操・岡本順一・佐伯彰一・関野英夫・関嘉彦・住田良能・
 島岡宏・志水速雄・瀬川善信・澤田マルガレーテ・住吉良人・斉藤孝・白鳥令・末松満・
 佐々木春隆・田中卓・高瀬保・高橋正則・田中正明・榎博・田上四郎・田村廣市・
 田北亮介・高橋正雄・上野直明・梅原一雄・漆山成美・宇野重昭・渡辺幸生・渡辺武・
 山本登・山中大吉・八木信雄・矢野健太郎・柳沢英二郎・山本勝市・逸名氏

第一一八八号 一九八一年一〇月号

「核」に関するアンケート(二)〔高木成・斎藤忠・五味俊樹・大西公照〕

一―一四

オタワ・サミットより帰ってきて―外務審議官・菊地清明氏語る

一五―二七

旅行文書の歴史(「ニュートン・ブラウン(林憲子訳)」)

二八―三一

第一一八九号 一九八一年一・二月合併号

巻頭言 ポーランド国民の熱いまなざし〔三好貞雄〕

北方領土問題の視角〔落合忠士〕

「強い日本」になれーそのとき、北方領土は戦わずして帰って来る〔武藤貞一〕

読感、栗原健編『佐藤尚武の面目』〔松村正義〕

中国における政治変動（八）〔浜田泰弘〕

第一一九〇号 一九八二年一月号

巻頭言 一九八二年の日本〔三好貞雄〕

対談 南北サミットと日本ー相互依存と連帯のカンクン精神〔菊地清明・広野良吉〕

一三八氏アンケート 八〇年代の政策課題〔世界平和教授アカデミー〕

中国における政治変動（九）〔浜田泰弘〕

第一一九一号 一九八二年二月号

巻頭言 ポーランド問題の核心 ヤルタ体制の否定〔三好貞雄〕

九年目を迎えた国連海洋法会議ー交渉長期化の原因と今後の見通し〔渡辺伸〕

外交夜話 国際的ということ〔枝村純郎〕

中国における政治変動（一〇）〔浜田泰弘〕

二一二

三一六

一七二四

二五二八

二九三二

二一三

四一三

一四二六

二七三二

一一二

三一

一一三

二四三二

第一一九二号 一九八二年三月号

巻頭言 地球は破滅寸前か〔三好貞雄〕

現在の国際情勢と日欧関係発展のために〔サー・ヒュー・コータツツイ〕

現代日本の安全保障論（上）〔五味俊樹〕

第三次国共合作提案の波紋〔上別府親志〕

中国統一問題の主導権は台湾側に―北京の統戦工作は「苦恋」の焦り〔藤井彰治〕

第一一九三号 一九八二年四月号

巻頭言 軍縮総会に臨む腹構え〔三好貞雄〕

弱って来たソ連軍〔佐藤三郎〕

現代日本の安全保障論（下）〔五味俊樹〕

核政策へ寄する謬見を匡す〔近藤真男〕

第一一九四号 一九八二年五月号

外交時報社・世界平和教授アカデミー共同主催 非核・軍縮等に関するアンケート

― 国際政治学者を中心に百七十七氏

〔安斎伸・渥美堅持・味岡義一・田駿・江上勲・江尻進・福地重孝・藤田豊・船戸鉦市・

五味俊樹・具島兼三郎・平石義親・法眼晋作・細川隆一郎・帆足計・堀之北重成・林三郎・

畑田重夫・今村之治・井上赳夫・伊藤行・一松信・伊藤憲一・五十嵐武士・市川正義・

二一八

三〇八

九一七

一八二六

二六一三

二一三

三一三

一三二七

二八一三

入江隆則・石田武雄・伊原吉之助・井上茂信・入江猪太郎・池上巖・市村真一・神川正彦・
 喜多村良雄・喜多川忠一・景山哲夫・笠原正明・北村謙一・嘉村祐一・加藤栄一・
 金山政英・木内信胤・勝田吉太郎・久保田信之・工藤重忠・久保敦彦・粕谷進・黒木晩石・
 金子孫一・経塚作太郎・上別府親志・河部利夫・加藤元三・甲谷悦雄・小森義峯・久保守・
 小林路義・近藤真男・三瀧信吾・元川房三・松本馨・牧内正男・武藤貞一・松井好・
 森松俊夫・三岡健次郎・宮村文雄・松金久知・武藤正行・松本明重・森本真章・真鍋一・
 中山治一・中川八洋・長浜穆良・名東孝二・西谷啓浩・難波田春夫・名越二荒之助・
 野村実・中村龍平・中山正和・永野茂門・長山義男・西本忠治・中村信夫・尾上正男・
 大畑篤四郎・小田村寅二郎・岡本幸治・緒田原涓一・太田一男・大鹿讓・太田富蔵・
 太田弘毅・大橋隆憲・小幡操・小関哲哉・落合忠士・岡本順一・下田武三・関嘉彦・
 関野英夫・関寛治・隅谷三喜男・白鳥令・佐々木春隆・清水馨八郎・宍戸寿雄・白崎和夫・
 関之・桜井光堂・鈴木瞭五郎・澤英武・重光晶・杉田一次・住吉良人・高根正昭・
 高瀬浄・築山治三郎・高橋正則・高橋正・武井昭・豊田悌助・高島信義・田上四郎・
 宇野重昭・宇野精一・漆山成美・上野直明・渡辺武・渡部昇一・和田盛哉・山口彦之・
 山本一登・結城陸郎・山田勝美・吉田和生・山中大吉・山崎大喜男・八木信雄・
 三智の会・吉田賢抗・小山房二・山本宏・丸山繁郎・田中正明・八藤雄一

第一一九五号 一九八二年六月号

卷頭言 英ア戦争の内包するもの (三好貞雄)

一一二

或る日の鼎談 核・軍縮・安全保障を考える―国連軍縮特別総会に直面して〔編集部〕

シーレーンの要衝―スリランカの国造り〔田中正明〕

中国における政治変動（一一）〔浜田泰弘〕

非核・軍縮に関するアンケート（続き）〔岩村博文・亀田侯治〕

第一一九六号 一九八二年七月号

巻頭言 アメリカの世界政策 あまりあせるな〔三好貞雄〕

ヨーロッパの安全保障について

―西独政府のパンフレットから〔外務省安保研究グループ有志訳〕

核兵器をめぐる政治〔ピュール・レルーシュ（五味俊樹訳）〕

小村寿太郎生誕地訪問記

―日露戦争における「限定戦争」構想のルーツがここにあった〔松村正義〕

中国における政治変動・脚注〔浜田泰弘〕

第一一九七号 一九八二年八・九月合併号

巻頭言 終戦記念日を迎えて改めてソ連の非道を想う〔三好貞雄〕

フォークランド紛争の一考察〔加藤吉弥〕

平和と軍縮―英国政府の政策案内（一九八二年一月）

〔英国外務省軍備管理軍縮研究課（編集部訳）〕

三一〇

一一一九

二〇―二八

二九―三一

二―二

三一―一九

二〇―二一

二二―二九

三〇―三二

二―二

三一―五

六一―六

転換点に立つインドシナ情勢〔牧内正男〕

最近の世界情勢〔甲谷悦雄〕

よく聞いて下さい〔長山義男〕

一七―二三

二四―二八

二九―三二

第一一九八号 一九八二年一〇月号

特集 外交時報社・世界平和教授アカデミー共同主催 教科書検定問題についてのアンケート

- 〔朝倉孝吉・会田雄次・浅田常三郎・安部博純・浅野祐吾・天野武一・味岡義一・秋月君茂・赤堀四郎・阿部忍・安斎伸・田駿・江尻進・福地重孝・藤井彰治・福岡克也・具島兼三郎・五味俊樹・平野健一郎・細川隆一郎・林卓男・畑田重夫・服部比左治・橋本健・林三郎・長谷川慶太郎・日野虎雄・平石義親・彦由一太・平井源一・林修三・市村真一・入江猪太郎・石村暢五郎・一瀬智司・池見猛・伊藤太郎・池田栄太郎・今村之治・一松信・伊藤清和・五十川和男・粕谷進・栗野鳳・北島平一郎・栗栖弘臣・近藤秀樹・加藤栄一・黒沢博・久住忠男・金井昌邦・嘉村祐一・気賀健三・甲谷悦雄・河部利夫・菅野英機・小山房二・河本弘・金山政英・黒木晚石・上別府親志・加藤元三・九嶋勝司・高原義男・金貴清・森本憲夫・三瀨信吾・三好修・牧内正男・武藤貞一・松下正寿・元川房三・松井好・萬成博・森松俊夫・宮崎正雄・武藤正行・松本明重・政次満幸・森三十郎・難波田春夫・名越二荒之助・中村初雄・中川八洋・中川融・中屋健一・西鶴定嘉・中村龍平・西本忠治・長山義男・根本準・緒田原涓一・太田雅夫・小幡操・太田弘毅・大島久・岡本順一・大塚忠実・岡本幸治・岡田実・大野垣博夫・大塚茂・尾関通允・扇貞雄〕

一―三三

第一一九九号 一九八二年二月号

ソ連の四年越し農作物不足は何を物語るか

二一二

南北対話の再活性化のために―一九八二年九月〔内田富夫〕

三一四

ソ連研究二題

モスクワにもチャイナ・カードはある〔パリス・チャン（五味俊樹訳）〕

一五一―一六

モスクワとの対処方法〔ディミトリ・K・サイムズ（五味俊樹訳）〕

一六一―一九

教科書検定問題に関するアンケート（二）

〔桜田武・太田富蔵・関嘉彦・白鳥令・塩川孝信・末松満・伊原吉之助・鈴木仁一・

白崎和夫・高橋正・滝沢寿一・田中啓輔・高橋正則・田口欽二・田中正明・滝原俊彦・

東畑平一郎・玉野敏夫・宇野精一〕

二〇一―三二

第二二〇〇号 一九八二年二月号

巻頭言 アンドロポフ新体制どうなるか〔三好貞雄〕

二一二

レーガン政権の対ソ戦略と日本の防衛〔落合忠士〕

三一―三五

一二回党大会は新出発点となるか〔上別府親志〕

一六一―二三

教科書検定問題に関するアンケート（三）

〔漆山成美・上野直明・植木松太郎・宇津野常人・渡辺武・渡辺昭夫・矢野健太郎・

安田敬二・山村文人・山崎堯太・山本勝市・山田昌一・大野勝己・渡部昇一・野村実・

桑本崇秀・山中大吉・杉田一次・宇野重昭・野村乙二朗・鶴沢義行・岡本成蹊・岡昌宏・

野田浩一・佐々木春隆・小林道德・三好新次・小谷鶴次・太田静六・真鍋一・市川正義・
黒羽秀夫・山崎大喜男・土田隆〕

二四―三三

第一二〇一号 一九八三年一月号

巻頭言 中ソ復交について〔三好貞雄〕

二―二

日米関係の将来―平和環境への視座構造〔五味俊樹〕

三一―三七

教科書検定問題に関するアンケート〔四〕

〔井上茂信・高橋和二郎・森本真章・甲谷悦雄・宮崎繁樹・高瀬浄・室靖・鈴木正・
尾上正男・神川正彦・金子孫市・寺脇保・近藤真男・井本台吉・大平善梧〕

一八―三三

第一二〇二号 一九八三年二月号

巻頭言 外交の継続性について〔三好貞雄〕

二―二

イスラエルと中東の哨煙〔前編〕―四次にわたる中東戦争〔落合忠士〕

三一―六

教科書検定問題に関するアンケート〔五〕

〔岡崎光顕・花崎文一・鈴木悌二・黒田魏・大鹿讓・岩村博文・関之・岩渕幸雄・
宮村文雄・三岡健次郎・宮司佑三・武田勝彦・多田顕・伊藤皓文・帆足計〕

一七―二六

教科書問題アンケートを終えて〔世界平和教授アカデミー調査部〕

二七―三二

第一二〇三号 一九八三年三月号

卷頭言 中曽根内閣の前途〔三好貞雄〕

イスラエルと中東の哨煙（中編）―パレスチナ・ゲリラの動向とレバノンの悲劇〔落合忠士〕

中国農業政策の転換とその前途（上）〔上別府親志〕

「キューバ」を訪ねて〔扇貞雄〕

最後に笑うもの（一）第一次世界大戦から今日に至る国家の盛衰を辿って

最後に笑うもの（国）を予想する〔池上勲〕

第一二〇四号 一九八三年四月号

卷頭言 ソ連の現況の一端〔三好貞雄〕

日本―ASEANの特殊関係と日本の「太平洋圏」発展戦略〔斐黙農〕

中国農業政策の転換とその前途（下）〔上別府親志〕

最後に笑うもの（二）第一次世界大戦から今日に至る国家の盛衰を辿って

最後に笑うもの（国）を予想する〔池上勲〕

第一二〇五号 一九八三年六月号

卷頭言 国際激流に棹す日本〔三好貞雄〕

イスラエルと中東の哨煙（後編）―憎しみの人間模様と和平への展望〔落合忠士〕

スペイン社会労働党―新政権の成立とその後〔古賀京子〕

二一二

三一―三三

一四―一六

一七―二〇

二一―三二

二一―二

三一―二二

一三―一六

一七―三一

二一―二

三一―三三

一四―二二

最後に笑うもの (三) 第一次世界大戦から今日に至るまでの国家の盛衰を辿って
最後に笑うもの (国) を予想する〔池上勲〕 一三―一三一

第一二〇六号 一九八三年七月号

巻頭言 どうもほんとうらしいソ連の最近の金詰り〔三好貞雄〕 二―三

ウイリアムズバーグ・サミットとわが国の国際的役割〔阿木八郎〕 四―一〇

日米安全保障態勢の基礎、本質を論ず〔近藤眞男〕 一―一四

最後に笑うもの (四) 世界大動乱の真相〔池上勲〕 一五―二四

外交時報社・世界平和教授アカデミー共同主催アンケート

国際政治における日本のあり方 (一)

〔宇野精一・甲谷悦雄・藤田豊・鈴木正・藤井彰治・高瀬保・関野英夫・伊東清和・

平石義親・西脇英逸・三浦信吾・河村一夫・栗栖弘臣・池見猛・真鍋一・上野直明・

中村信夫・牧内正男・寺松孝・小竹即一・中川融・九嶋勝司・津久井龍雄・伊手健二〕 二五―三二

第一二〇七号 一九八三年八月号

巻頭言 非武装中立の社会党〔三好貞雄〕 二―二

中国、台湾関係の現況とその展開 (上)〔中川昌郎〕 三―九

ロンドン海軍軍縮会議における財部全権の立場 (上)〔河村一夫〕 一〇―一四

最後に笑うもの (五) 世界大動乱の真相〔池上勲〕 一五―二三

国際政治における日本のあり方(二)

〔尾関通允・和田盛哉・扇貞雄・末松経正・一瀬智司・松本明重・小林路義・増田重光・築山治三郎・堀元美・北島平一郎・河部利夫・奥田健吾・福尾券一・一松信・長山義男・加藤弘・小幡操・景山哲夫・福島恒啓・郷司浩平・杉田一次〕

二四―三二

第二二〇八号 一九八三年九・一〇月合併号

巻頭言 血ぬられたる政権(三好貞雄)

二―二

インドシナ難民問題―主要先進国閣僚級会合と難民問題〔増井正〕

三―七

ロンドン海軍軍縮会議における財部全権の立場(下)〔河村一夫〕

八―一四

最後に笑うもの(六) 世界大動乱の真相〔池上勲〕

一五―二七

大韓民航機、ソ連軍用機による撃墜事件考察〔扇貞雄〕

二八―二八

国際政治における日本のあり方(三)

〔佐々木春隆・彦由一太・西野吉次・田中正明・片岡正巳・山上賢一・白川清・今村和男〕

二九―三二

第二二〇九号 一九八三年十一月号

巻頭言 ワレサ受賞に思う

一―一

中距離核戦力(INF)交渉の経緯と現状〔高田稔久〕

二―八

中国、台湾関係の現況とその展開(中)〔中川昌郎〕

九―一四

最後に笑うもの(七) 世界大動乱の真相〔池上勲〕

一五―二九

国際政治における日本のあり方 (四)

〔元川房三・根本準・稲葉秀三・池田栄太郎・太田静六・谷口博〕

三〇―三二

第二二一〇号 一九八三年二月号

巻頭言 既に第三次世界大戦か (三好貞雄)

二―二

最近のレバノン情勢 (内紛の構造を中心に) (黒川剛)

三―一

中国、台湾関係の現況とその展開 (下) (中川昌郎)

二一―一八

最後に笑うもの (八) 世界大動乱の真相 (池上勲)

一九―一八

国際政治における日本のあり方 (五)

〔桑木崇秀・松下正寿・伊藤行・関之・内藤宏・助野健太郎・天満経昌・結城隆郎・

空花圭一・大平善梧・中西武雄・野村実〕

二九―三二

第二二一一号 一九八四年一月号

巻頭言「ソ連の立場」と日本の総選挙 (三好貞雄)

二―二

外交青書にみる我が国の外交 (稲川照芳)

三―九

限定戦争としての日露戦争と戦略家・小村寿太郎 (松村正義)

一〇―一七

投書欄 (外交春秋) 日本外交におけるグレイ・エイリア (Grey Area) の勧め (五味俊樹)

一八―二一

最後に笑うもの (九) 世界大動乱の実相 (池上勲)

二二―二八

北中国・極東シベリア―秘密戦・懐古の旅 (上) (扇貞雄)

二九―三二

第一二二二号 一九八四年二月号

巻頭言 ソ連は自爆するのか〔三好貞雄〕

サハラからの年賀状〔佐藤俊一〕

外交春秋 防衛政策について〔黒木晩石〕

東京裁判と『南京大虐殺』の虚構〔田中正明〕

外交春秋 日本の内外政策について〔江尻進〕

最後に笑うもの（一〇） 世界大動乱の実相〔池上勲〕

北中国・極東シベリア秘密戦・懐古の旅（中）〔扇貞雄〕

第一二二三号 一九八四年三・四月合併号

巻頭言 下り坂にさしかかったソ連

パレスチナ解放機構（PLO）の一特性

アラブ分裂の縮図としてのPLOの内紛〔黒川剛〕

外交春秋 松村正義氏の「限定戦争としての日露戦争と小村寿太郎」を読んで〔黒木晩石〕

朝鮮半島の平和統一会議提案について〔牧内正男〕

かつてのツアールスコエ・セロもいまはプーシユキンに

ーレニングラード郊外の旧離宮（上）〔松村正義〕

最後に笑うもの（一一） 世界大動乱の実相〔池上勲〕

北中国・極東シベリアー秘密戦・懐古の旅（下）〔扇貞雄〕

二二二

三一六

六一六

七一八

一九一八

二〇一八九

三〇一三二

二二二

三一〇

一一一

二二一四

一五一八

一九一八

二九一三二

第一二二四号 一九八四年五月号

巻頭言 波荒き日本海

二二二

イラン・イラク紛争の現状と今後の見通しについて〔小橋雅明〕

三一〇

共産主義は一枚岩ではない〔牧内正男〕

一一一—一三

外交春秋 中国残留日本人孤児をソ連は何と見るか〔平石義親〕

一四一—一四

かつてのツアールスコエ・セロもいまはプーシユキンに

ーレニングレード郊外の旧離宮（下）〔松村正義〕

一五一—一九

ソ連新指導部の動向と中国の内政改革〔甲谷悦雄〕

二〇一—二七

外交春秋 日本政治の民主化は可能か〔亀田亜州〕

二七一—二八

最後に笑うもの（一二） 世界大動乱の実相〔池上叡〕

二九一—三二

第一二二五号 一九八四年六月号

巻頭言 モスクワの仇をロサンゼルスで

二一二

最近のアフガニスタン情勢〔岡部直己〕

三一五

レバノンをめぐる国際政治の動向〔落合忠士〕

六一—七

山名寿三先生を悼む〔大西公照〕

一八一—一九

整党の第二段階と農村経済の現代化―「紅旗」「人民日報」三月の論調〔上別府親志〕

二〇一—二六

最後に笑うもの（一三） 世界大動乱の実相〔池上叡〕

二七一—三二

第二二一六号 一九八四年七月号

卷頭言 人權無視が生む悲劇

二一二

パキスタンの内外情勢〔竹内好一〕

三一―二

アジア国家連合の早期結成を提唱する〔廣田洋二〕

一三一―一四

アジア・太平洋―外交の新展開〔牧内正男〕

一五一―一九

米大統領訪中と中国の非同盟国家説―「紅旗」「人民日報」四月の論調〔上別府親志〕

二〇―二六

最後に笑うもの（一四）世界大動乱の実相〔池上勲〕

二六―三二

第二二一七号 一九八四年八月号

卷頭言 二つの大きい防衛問題

二一―二

最近のインド―政治・経済情勢と日印関係〔鈴木茂伸〕

三一―一〇

一九三〇年代の国際政治観における逆説

―蠟山政道を中心にして斉藤隆夫との比較〔五味俊樹〕

一一―二〇

三中総路線の堅持と対外開放の推進―「紅旗」「人民日報」五月の論調〔上別府親志〕

二一―二七

市民権を確保できるか中国の社会主義（上）〔上別府親志〕

二八―三〇

四〇年振り中支江南の地を訪ねて〔扇貞雄〕

三一―三二

第二二一八号 一九八四年九・一〇月合併号

卷頭言 ソ連離れのアフリカ諸国

二一―二

カンボディア問題〔篠原勝弘〕

新刊紹介 大臣官房国内広報課編『こちら外務省』〔牧内正男〕

核時代の安全保障〔関野英夫〕

対外開放と政策緩和の定着化進む―「紅旗」「人民日報」六・七月の論調〔上別府親志〕

国連の専門機関に改革の声〔牧内正男〕

第二一九号 一九八四年二月号

巻頭言 クレムリンの横槍

累積債務問題は峠を越したか―現状と展望〔山本啓司〕

米国NSCの対日政策策定過程（上）〔伊藤皓文〕

軍内文革派一掃と愛国主義の鼓吹―「紅旗」「人民日報」八月の論調〔上別府親志〕

市民権を確保できるか中国的社会主義（下）〔上別府親志〕

国連活性化のために〔牧内正男〕

第二二〇号 一九八四年二月号

巻頭言「資本主義化」する共産中国〔M〕

安倍外務大臣のメキシコ訪問と中南米外交〔赤沢正人〕

中米の危機とアメリカのジレンマ（上）〔落合忠士〕

米国NSCの対日政策策定過程（下）〔伊藤皓文〕

三一―一

一一―一二

一三―二〇

二一―二九

三〇―三二

二―二

三一―一〇

一一―一七

一八―二四

二五―二九

三〇―三二

二―二

三一―一〇

一一―一六

一七―二二

戦火を拓げるもの〔牧内正男〕

一三二―一三五

消費拡大こそ生産発展の原動力―「紅旗」「人民日報」九月の論調〔上別府親志〕

二六―三二

第一二二二号 一九八五年一月号

巻頭言 当てにならぬクレムリン式「数字」〔M生〕

二―二

アフリカ旱魃被災地を視察して〔東博史〕

三―七

中米の危機とアメリカのジレンマ（下）〔落合忠士〕

八―一三

経済体制改革の理論と実際―「紅旗」「人民日報」一〇月の論調〔上別府親志〕

一四―二〇

中支江南地区農民の勤労意欲に触れて〔扇貞雄〕

二一―二二

台湾をめぐる〔牧内正男〕

二三―二五

広田弘毅像の再考（上）〔五味俊樹〕

二六―三二

第一二二三号 一九八五年二月号

巻頭言 中ソ交渉は簡単ではない〔M〕

二―二

ダンバートン・オークス荘に国連憲章の起草期を思う（上）〔松村正義〕

三―八

中曽根総理の太平洋訪問（上）〔加茂佳彦〕

九―一

広田弘毅像の再考（下）〔五味俊樹〕

一一―一三

「太平洋協力」の問題点〔牧内正男〕

二四―二五

経済優先と社会主義理論の新解釈―「紅旗」「人民日報」一一月の論調〔上別府親志〕

二六―三二

第一二二三号 一九八五年三・四月合併号

卷頭言 ゴルバチョフ政権の実体

二一二

中曽根総理の大洋州訪問（下）〔加茂佳彦〕

三一九

ダンバートン・オークス荘に国連憲章の起草期を思う（下）〔松村正義〕

一〇一—一三

NSC 68—米国の国家安全保障論（上）〔伊藤皓文〕

一四—一八

社会主義商品経済と価格体系の改革—「紅旗」〔人民日報〕一二・一月の論調〔上別府親志〕

一九—二八

宇宙軍事化の問題点〔牧内正男〕

二九—三二

第一二二四号 一九八五年五月号

卷頭言 米ソ軍縮交渉とソ連の新世代〔M生〕

二—二

田村幸策先生追悼号〔三好貞雄〕

三—三

田村幸策先生の思い出〔池井優〕

三—四

田村幸策先生の思い出〔瀬川善信〕

四—五

最近の南米事情〔稲川照芳〕

六一—一三

NSC 68—米国の国家安全保障論（下）〔伊藤皓文〕

一四—二三

農村と都市の経済体制改革—「紅旗」〔人民日報〕二月の論調〔上別府親志〕

二四—三〇

北京の中心〔牧内正男〕

三一—三二

第一二二五号 一九八五年六月号

卷頭言 虚々実々の米ソ軍事合戦〔M生〕

二一—二

ナイジェリアの政治経済情勢―ブハリ新政権の一年を振り返って〔原祐二〕

三一—三三

不毛の流血イラン・イラク戦争の泥沼化（上）〔落合忠士〕

一四—二二

社会主義思想の徹底と規律強化―「紅旗」「人民日報」三月の論調〔上別府親志〕

二一—二九

ソ連と東欧〔牧内正男〕

三〇—三二

第一二二六号 一九八五年七月号

卷頭言 横行するテロリズム〔M生〕

一—一

緊張緩和と政治への一試論―米中デタント〔貫芳祐〕

二—二三

難航するSDI〔牧内正男〕

二四—二六

不毛の流血イラン・イラク戦争の泥沼化（下）〔落合忠士〕

二七—三〇

新考 貨幣論〔上野直明〕

三一—四二

第一二二七号 一九八五年八月号

卷頭言 中国の動きと国際潮流〔M生〕

一—一

レーガン政権における対外政策決定過程

―レバノン駐留多国籍軍の派遣を中心にして〔宮脇岑生〕

二—二六

日米経済摩擦の文化的側面〔五味俊樹〕

二七—三八

西側内部の「計画競争」―ユーレカとSDI〔牧内正男〕	三九―四一
六期全人大第三回会議と政協会議―「紅旗」―「人民日報」・四月の論調〔上別府親志〕	四二―五一
解放軍百万の削減と編制簡素化―「紅旗」―「人民日報」六月の論調〔上別府親志〕	五二―六〇

第一二二八号 一九八五年九・一〇月合併号

巻頭言 中ソの態度とモンゴル問題など〔M生〕	一―一
環太平洋時代の通商摩擦と安全保障〔齋藤進〕	二―九
「ヒロシマ」への追憶〔五味俊樹〕	一〇―一〇
アメリカは間違っていた〔ガー・アルペロヴィッツ〕〔五味俊樹訳〕	一〇―一三
アメリカは正しかった〔ジョン・コナー〕〔五味俊樹訳〕	一四―一六
混迷深まる南アフリカの政情〔牧内正男〕	一七―二〇
人材を要請する経済発展と教育改革―「紅旗」―「人民日報」五月の論調〔上別府親志〕	二一―二九
経済的効率的運営と経済立法―「紅旗」―「人民日報」七月の論調〔上別府親志〕	三〇―四一
「フィンランド化」の実態をこの目で視る〔扇貞雄〕	四二―四六

第一二二九号 一九八五年十一月号

巻頭言 西側の結束を破るな〔M生〕	一―一
兵器輸出「大国」フランス―国防理念と経済的要請の接点として〔中村雅治〕	二―一九
昭和初期田中政友会内閣の対満蒙政策〔佐藤元英〕	二〇―三四

中ソとアジアの新情勢〔牧内正男〕

回想の抗日・反ファシスト戦争―「紅旗」―「人民日報」八月の論調〔上別府親志〕

第一二三〇号 一九八五年二月号

巻頭言 中ソの「共産主義」離れ傾向〔M生〕

三好貞雄先生追悼号〔五味俊樹〕

三好貞雄―略年譜・主要著作目録

三好さんを惜しむ〔江田正己〕

三好貞雄先生のご逝去を悼む〔大西公照〕

『外交時報』と私（青木周蔵関係の研究について）〔河村一夫〕

忘れ得ぬ交友の日々〔斎藤忠〕

内剛の生涯〔平石義親〕

三好貞雄先生を悼む〔松本明重〕

三好貞雄社長の永眠を悼む〔山中大吉〕

御忌状

諜報の側面から見た真珠湾謀略説〔戸部良一〕

党全国代表会議と指導部の新旧交代―「紅旗」―「人民日報」・九月の論調〔上別府親志〕

国連の現状とその改革について〔牧内正男〕

三五―三八

三九―四八

一―一

二―二

三―三

四―六

七―九

一〇―一二

一三―一三

一四―一五

一六―一七

一八―一九

二〇―二一

二二―三七

三八―四六

四七―五〇

第一二三三一号 一九八六年一月号

卷頭言 危機のフィリピンと日米〔M生〕

「南北問題の現状と展望」〔南北問題研究会〕

日中関係の原点と展望〔村井友秀〕

米ソ首脳会議をめぐる国際政局〔牧内正男〕

第三世界各国との連帯の強化―「紅旗」―「人民日報」・一〇月の論調〔上別府親志〕

東郷茂徳陳述録（一）〔波多野澄雄解説〕

第一二三三二号 一九八六年二月号

卷頭言 カンボジアに平和を〔M生〕

信頼醸成措置と防衛政策〔中村好寿〕

ラテンアメリカの権威主義体制とカーター人権外交〔乗浩子〕

広がる社会主義離れと整党運動―「紅旗」・「人民日報」十一月の論調〔上別府親志〕

第一二三三三号 一九八六年三月号

卷頭言 国際テロに備えるのは当然〔M生〕

東南アジアに新風―アキノ政権と米、日、その他〔牧内正男〕

貿易摩擦をめぐる「異文化との共生」〔五味俊樹〕

東郷茂徳陳述録（二）

一〇一

二二二〇

二二一二八

二九一三二

三三一四一

四二一六〇

一〇一

二一一五

一六一三〇

三一四〇

一〇一

二一五

六一一五

一六一三八

中国農業経済改革の第二段階―「紅旗」・「人民日報」一二月の論調〔上別府親志〕

三九―四八

第一二三四号 一九八七年一月号

特集 国際社会と日本

巻頭言 イメージとしての国際社会と日本〔武者小路公秀〕

二―三

現代の戦争と国際安全保障問題〔蠟山道雄〕

四―一三

「ヨーロッパ」の復興〔樗木航三郎・佐々木實雄〕

一四―二一

覇権後退期における政治意志危機―ドル暴落と日米経済関係〔貫芳祐〕

二二―三八

日本（人）にとっての「国際化」とは〔五味俊樹〕

三九―五二

外交史コーナー

石井・ランシング協定と日米海軍協定―日本海軍のハワイ警備がもたらしたもの〔平間洋一〕

五三―六三

第一二三五号 一九八七年二月号

特集 南北問題の新しい展開

巻頭言 南北問題と三つの〈南〉の顔〔武者小路公秀〕

二―三

第七回国連貿易開発会議と最近の南北問題の諸様相〔南北問題研究会〕

四―一三

UNCTADにおける一次産品問題への取組み〔南田剛〕

一四―二二

開発資金と累積債務問題―一九八六年の動向を振り返って〔北川寛〕

二三―四四

アジアと日本の経済関係を考える〔粕谷雄二〕

四五―五九

外交史コーナー

統帥権再考―司馬遼太郎氏の一文に寄せて〔加藤陽子〕

六〇―七一

第一二三六号 一九八七年三月号

特集 平和と軍縮・軍備管理問題

巻頭言 軍縮・軍備規制と時間〔武者小路公秀〕

二―三

平和外交の理念を問い直す〔蠟山道雄〕

四―一三

現代の軍縮と軍備管理〔今井隆吉〕

一四―二八

米ソ軍備管理交渉の新たな展開〔編集部〕

二八―二八

軍備管理・軍縮条約の履行をめぐる諸問題

―アメリカにおけるSALT論議を中心に〔宮脇容生〕

二九―四九

米ソ軍備管理交渉とアメリカ〔納家政嗣〕

五〇―六四

外交史コーナー

「対手トセス」声明再考（上）〔戸部良一〕

六五―七一

第一二三七号 一九八七年四月号

特集 東アジアの新情勢

巻頭言 外交指導者とは〔池井優〕

二―三

失脚の「理屈」―中国共産党にみる指導者の解任劇〔横山宏章〕

四―一三

「胡耀邦再登場」をどう読むか〔編集部〕

朝鮮半島の新しい動き―改憲政局と南北対話の展望〔山岡邦彦〕

朝鮮半島、その後の展開〔編集部〕

アメリカのアジア政策―「封じ込め」から「調整者」へ〔吉原欽二〕

ゴルバチョフ政権の対アジア政策〔宮崎英隆〕

外交史コーナー

「対手トセス」声明再考（下）〔戸部良一〕

第一二三八号 一九八七年五月号

特集 西ヨーロッパの再考

巻頭言 姉妹都市交流〔池井優〕

ヨーロッパの文化か、ヨーロッパにおける文化か〔ホセ・ヨンパルト〕

抑止と同盟―NATO西欧諸国と超大国〔金子讓〕

排ガス規制問題にみられるECの動き

―政策決定の特徴と加盟国間の結束の在り方について〔高瀬幹雄〕

ヨーロッパ産業の再建―そしてヨーロッパの再生〔高山龍三〕

ヨーロッパの産業政策〔井上孝〕

自由論文コーナー

中国の軍事戦略（上）―国防現代化の意味について〔村井友秀〕

一三一―一三三

一四―二九

二九―三〇

三一―四四

四五―五八

五九―六七

二―三

四―一二

一三―二六

二七―四三

四四―五三

五四―六三

六四―七一

第一二三九号 一九八七年六月号

特集 ラテンアメリカの苦悩

巻頭言 日伯文化交流〔池井優〕

二一三

大転換期のラテンアメリカ〔グスタボ・アンドラーデ〕

四一八

ラテンアメリカにおける民主主義の行末〔編集部〕

一八一—一八

八〇年代の債務問題と債務交渉―ラテンアメリカの事例から〔高安健一〕

一九一—三一

中南米諸国とアメリカ合衆国の反共政策〔庄司真理子〕

三二—四八

ラテンアメリカにおける移民史研究の最近の動向―対外意識を中心として〔浅香幸枝〕

四九—五九

自由論文コーナー

中国の軍事戦略（下）―国防現代化の意味について〔村井友秀〕

六〇—六九

第一二四〇号 一九八七年七月・八月合併号

特集 ソ連・東欧圏の諸問題

巻頭言 チェコ事件二〇年〔池井優〕

二一三

ゴルバチョフ改革の二年〔西村文夫〕

四一—二〇

「ペレストロイカ」と東欧のパラドックス〔編集部〕

二〇—二〇

コム体制強化の動向と内部矛盾〔山本武彦〕

二一—三一

東欧における民族と国家―トランシルヴァニアをめぐる民族問題〔羽場久渥子〕

三二—四七

米中デタントとソ連のパーセプション（上）―一九六八―一九七一〔貫芳祐〕

四八—五八

政治的アマチュアリズムの寿命〔編集部〕

五九―五九

外交史コーナー

語学と外交―国益によって変わる解釈 第一次世界大戦の実例から〔平間洋一〕

六〇―七一

第一二四一号 一九八七年九月号

特集 東南アジアと日本

巻頭言 日タイ修好百年〔池井優〕

二―三

日本外交における東南アジア―地域概念の成立と発展の軌跡〔渡辺昭夫〕

四―一八

二〇周年を迎えたASEAN―成熟か停滞か〔黒柳米司〕

一九―二九

対ASEAN援助と日本外交〔稲田十一〕

三〇―四六

前特集号続編

米中デタントとソ連のパーセプション（下）―一九六八―一九七一〔貫芳祐〕

四七―五八

自由論文コーナー

ベルリンの「壁」への危機収斂過程〔星乃治彦〕

五九―七一

第一二四二号 一九八七年一〇月号

特集 南部アフリカ新情勢の展開

巻頭言 サリム外務大臣の想い出〔池井優〕

二―三

アフリカ特集にあたって〔青木一能〕

四―五

アンゴラ内戦とその意味〔青木一能〕

六一―九

ジンバブエに見るアメリカの対南部アフリカ政策と南アフリカ共和国のヘゲモニー

〔平野克己〕

三〇―五四

自由論文コーナー

最近の国際金融情勢と複数基軸通貨制への展望〔斎藤進〕

五五―六一

オーストラリア外交の変遷（上）―「自立」の模索〔佐伯康子〕

六二―七一

第一二四三号 一九八七年一・一二月合併号

特集 米国と日本

巻頭言 国際交流基金とモーレイ教授の受賞〔池井優〕

二―三

米国における法的保護主義〔松下満雄〕

四―一六

アメリカの責任〔編集部〕

一六―一六

八七年包括貿易法案とアメリカ議会〔小川敏子〕

一七―三一

関心度の差異〔編集部〕

三一―三一

対日経済関係の構図―スウェーデンから見た日米経済摩擦〔川崎一彦・佐々木實雄〕

三二―四五

外為法強化に思う〔安原洋子〕

四六―五二

ヒスパニックの台頭がもたらすもの〔編集部〕

五三―五三

外交史コーナー

アメリカ太平洋沿岸実業界の対日「民間経済外交」

―日露戦争後の日米経済関係の一側面〔木村昌人〕

五四―六六

自由論文コーナー

オーストラリア外交の変遷（下）―「自立」の模索〔佐伯康子〕

六七―七五

第一二四四号 一九八八年一月号

特集 環太平洋地域の展望

巻頭言 大平首相と環太平洋の連帯〔池井優〕

二―三

わが国と環太平洋地域との文化交流〔田島高志〕

四―一三

オーストラリア―「アジア太平洋国家」への道〔菊池努〕

一四―二四

豪州における産業調整問題―鉄鋼業を中心として〔中北徹〕

二五―三八

太平洋時代における日本外交の基本的視座〔五味俊樹〕

三九―五〇

自由論文コーナー

S D I の虚構性―M A D と S D I の相剋〔高塚年明〕

五一―六七

第一二四五号 一九八八年二月号

特集 世界経済の行末

巻頭言 ニクソンショックを超えて〔池井優〕

二―三

自由貿易主義と保護貿易主義〔井上孝〕

四―一八

世界経済運営体制の再構築、一九八五―八七―G 7 と為替安定・不均衡是正〔貫芳祐〕

一九―三九

日本・EC関係寸描〔EC研究サークル〕
 新局面に入った累積債務問題〔石崎昭彦〕

エッセー

豊かな生活の実現と経済力―イタリア人のヴァカンス〔三田千代子〕

第一二四六号 一九八八年三月号

特集 体制と反体制との情況

巻頭言 体制・反体制・新体制〔池井優〕

ソ連における政治的異端と反体制問題―ソ連人権運動の国際化の成果〔吉川元〕

ソ連スターリン批判再開の行方―六〇年代後半ソ連政治と現在〔岩田賢次〕

ホー・チ・ミンの遺産と後継者たち〔小笠原高雪〕

中国の少数民族と民族自決権〔村井友秀〕

「体制」vs.「反体制」問題における大国の「影」〔編集部〕

第一二四七号 一九八八年四月号

特集 SDIをめぐる諸問題

巻頭言 SDI研究と日本〔池井優〕

核軍縮交渉におけるソ連の反SDI政策〔滝沢一郎〕

SDI参加問題と日本の対応―国会におけるSDI論議を手がかりとして〔等雄一郎〕

四〇―四六
 四七―六六

六七―七三

二―三

四―二四

二五―四六

四七―六〇

六一―七二

七二―七三

二―三

四―一七

一八―三二

「スターウォーズ」論争―戦略防衛構想と攻撃衛星兵器〔斎藤直樹〕

信頼醸成措置の概念について〔浅田正彦〕

自由論文コーナー

日本の救援によるポーランド人孤児の帰国〔ジョージ・J・レルスキ（横尾和歌子訳）〕

第一二四八号 一九八八年五月号

特集 グローバリゼーションとナシヨナリズム

巻頭言 ナシヨナリズムの諸要素〔池井優〕

現代世界の構造と秩序理念―ナシヨナリズム・ユニオニズム・グローバリズム〔田村正勝〕

国民国家の変容と日本の国際化〔中島浩幸〕

貿易統計からみた電気通信サービスの国際化〔山下東子〕

インド頭脳労働者のアメリカ合衆国への移住〔蔵谷哲也〕

自由論文コーナー

北清事変と日本の対応―厦門事件と日本海軍〔波多野勝〕

第一二四九号 一九八八年六月号

特集 国際法の今日的課題

巻頭言 万国公法から国際法へ〔池井優〕

武力の行使と国際法〔高井晋〕

三三一―四八

四九―六五

六六―七一

二―三

四―一六

一七―二九

三〇―四二

四三―五九

六〇―七三

二―三

四―一七

現代国際法における人権法の展開〔佐藤文夫〕	一八一―三七
国連海洋法条約におけるグローバリズムとナショナリズム―パルドー主義への挽歌〔布施勉〕	三八―五二
承認の国際法上の意義をめぐって〔白杵英一〕	五二―七二

第二二五〇号 一九八八年七月・八月合併号

特集 大国と地域紛争

巻頭言 対岸の火事〔池井優〕	二―三
中米・カリブ地域の紛争と大国〔乗浩子〕	四―一八
イラン・イラク戦争とソ連の対応〔角田安正〕	一九―三二
南部アフリカの紛争と大国の介入	
― パックス・アフリカーナとパックス・サウスアフリカーナ〔井上一明〕	三三―五二
― アフガニスタン紛争の特色と今後の課題〔小原武〕	五三―六一
自由論文コーナー	
一つの糸で結ばれた日米科学技術協定と東芝事件〔安原洋子〕	六二―七八

第二二五一号 一九八八年九月号

特集 国際接触の多面性

巻頭言 オリンピックの効用〔池井優〕	二―三
国際接触の多面性―政府間レベルの文化的側面の現状〔田島高志〕	四―一四

ガット紛争処理機能の発展と米国の対応〔明田ゆかり〕

横浜市と国際交流〔佐々木寛志〕

意識の「国際化」―高校生、大学生の調査から〔平尾桂子〕

ナシヨナリズムと民族集団―ブラジルの国家統合と日本人移住者〔三田千代子〕

自由論文コーナー

国際的人権保障と憲法〔庄司克宏〕

七一―八四

第一二五二号 一九八八年一〇月号

特集 国際統合の未来

巻頭言 世界政府、世界連邦は可能か〔池井優〕

二―三

欧州共同体の理念と現実―その政治経済哲学的考察〔大庭治夫〕

四―一四

ECの市場統合とその国際的影響〔田中俊郎〕

一五―二六

A S E A Nの地域協力―その展開と制度の課題〔首藤もと子〕

二七―四二

近代日本における非西欧的国家像の模索〔長谷川雄一〕

四三―五五

自由論文コーナー

日本の対ソ交渉態度―二つの国交樹立交渉にみられる特色〔小澤治子〕

五六―七二

第一二五三号 一九八八年一・二月合併号

特集 エスニツクの視点

巻頭言 エスニックと日本〔池井優〕

二一三

わが国の外国人労働者受入れ問題〔広田崇夫〕

四二〇

インド・シク教徒の分離独立運動〔山下高明〕

二一―三五

トルコにおける「国民国家」形成とアイデンティティーの変容〔鈴木董〕

三六―四四

フランスにおける移民問題とルペン現象〔中村雅治〕

四五―六五

自由論文コーナー

「ミッテラン時代」とその政治的潮流〔渡邊啓貴〕

六六―八〇

第一二五四号 一九八九年一月号

特集 日米関係の再構築

巻頭言 駐日アメリカ大使と日米関係〔池井優〕

二―三

ブッシュ新政権と日米経済関係―日・米・ANIEsの三局構造を踏まえて〔中北徹〕

四―一六

米国における対日責任分担論議―議会、政府を中心にして〔高杉忠明〕

一七―三二

貿易統制分担か、防衛分担か―東芝機械事件を再考する〔安原洋子〕

三三―五〇

ブッシュ政権の誕生とアメリカ政治の変容〔川野秀之〕

五一―六一

自由論文コーナー

米国の立法過程における大統領と議会〔谷勝宏〕

六二―八三

第一二五五号 一九八九年二月号

特集 国連の現状と課題

巻頭言 国際連合と日本〔池井優〕

二一三

わが国の国連政策〔木島輝夫〕

四一―一五

国際連合と平和の創造〔白井久和〕

一六―三二

一九八三年グレナダ侵攻と国際機構〔庄司真理子〕

三三―五〇

紛争解決のための国連平和維持活動〔上〕〔G・G・グラインドル（野澤基恭訳）〕

五一―七一

自由論文コーナー

横田喜三郎の軍国主義批判〔上〕―戦時期の評論活動〔竹中佳彦〕

七二―九五

第一二五六号 一九八九年三月号

特集 国際社会への貢献―過去・現在・未来

巻頭言 地道な貢献―青年海外協力隊〔池井優〕

二―三

国際公共財の諸相〔坂本正弘〕

四一―一七

国際金本位制再訪―パックス・ブリタニカにおける国際公共財供給メカニズム〔中島正人〕

一八―三一

パックス・アメリカーナの盛衰〔新井光吉〕

三二―四八

「国際的貢献」に対する日本のアプローチ―経済大国にとっての課題〔池田維〕

四九―六六

前号特集からの続き

紛争解決のための国連平和維持活動〔下〕〔G・G・グラインドル（野澤基恭訳）〕

六七―七九

自由論文コーナー

横田喜三郎の軍国主義批判（下）―戦時期の評論活動〔竹中佳彦〕

八〇―一〇〇

第一二五七号 一九八九年四月号

特集 ソ連の新しい波

巻頭言「今日のソ連邦」に見る変化〔池井優〕

二―三

中ソ友好関係の背景と展望〔村井友秀〕

四―一四

ゴルバチョフ政権の対東欧支配論理の改変〔宮崎英隆〕

一五―二九

ソ連の民族問題―バルト三国の場合〔角田安正〕

三〇―四二

フルシチョフの対日国交正常化外交（上）―その今日的意義〔斎藤元秀〕

四三―五七

自由論文コーナー

政策広報型の金子堅太郎と文化交流型の末松謙澄〔松村正義〕

五八―六七

第一二五八号 一九八九年五月号

特集 経済と国家主権

巻頭言 幻の東亜経済同盟―西原借款〔池井優〕

二―三

米国における国家安全保障と通商制限〔松下満雄〕

四―一八

農産物貿易ルール形成をめぐる国際政治

―米・EC農産物紛争に見る国内政治の論理〔明田ゆかり〕

一九―三四

高度情報化と知的財産権―その国際的側面〔石黒一憲〕

ブラジルの日系企業と外資規制〔小池洋一〕

前号特集からの続き

フルシチョフの対日国交正常化外交（下）―その今日的意義〔斎藤元秀〕

自由論文コーナー

山本内閣の外交と世論（上）〔波多野勝〕

第一二五九号 一九八九年六月号

特集 朝鮮半島情勢

巻頭言 日本と韓国―近くて遠い国〔池井優〕

朝鮮中央通信社の役割―本特集の解説に代えて〔伊豆見元〕

中ソ論争と北朝鮮―対中自主性の模索〔平岩俊司〕

一九四八年の北朝鮮契約法〔藤井新〕

一揆か陣痛か―韓国労働運動の現状〔大江志伸〕

韓国外交における「ハルシユタイン・ドクトリン」の放棄の過程（上）

―朴正熙大統領「平和統一外交宣言」への道程〔倉田秀也〕

自由論文コーナー

山本内閣の外交と世論（下）〔波多野勝〕

三五―四二

四三―五三

五四―七一

七二―八三

二―三

四―七

八―二五

二六―三九

四〇―四五

四六―五八

五九―七一

第二二六〇号 一九八九年七・八月合併号

特集 米ソデタントの余波

巻頭言 鉄のカーテン……デタント〔池井優〕

二一三

米中ソ新デタントの中の南アジア―回顧と展望〔山下高明〕

四一七

ペレストロイカ下の東欧―「多様性への回帰」〔羽場久泥子〕

一八一―二九

インドシナ戦争の終焉―米越関係正常化の展望〔小笠原高雪〕

三一―四四

新デタントと中米紛争〔田中高〕

四五―五六

前号特集からの続き

韓国外交における「ハルシユタイン・ドクトリン」の放棄の過程〔下〕

五七一―六九

―朴正熙大統領「平和統一外交宣言」への道程〔倉田秀也〕

四一―五七

第二二六一号 一九八九年九月号

特集 安全保障問題の焦点

巻頭言 中国も認めた日米安保〔池井優〕

二一三

アジア・太平洋地域の安全保障〔森本敏〕

四一―七

戦略兵器削減交渉と米国の戦力態勢〔梅本哲也〕

一八一―三二

ソ連の構想する包括的安全保障体制〔中野潤三〕

三三―四七

西独・仏関係とヨーロッパの安全保障〔長島純〕

四九―六四

自由論文コーナー

田中内閣と日中航空協定（上）〔時任英人〕

六五一―八三

第一二六二号 一九八九年一〇月号

特集 人権をめぐる諸問題

巻頭言 カーター政権と人権外交〔池井優〕

二―三

人権外交〔デイヴィド・ウエッセルズ（横尾和歌子訳）〕

四―一六

次の千年紀に向けて

―一九九〇年代における人権〔ローリィ・S・ワイズバーク（佐藤文夫訳）〕

一七―二九

東西関係と人的移動の自由

―ヘルシンキ・プロセスにおける「人的接触」の保障体制の成立過程を中心に〔吉川元〕

三―一五〇

国籍と公務就労権〔広田崇夫〕

五―一六七

中国の最近の民主化運動と国際法規―国民主権・人権・自決権〔家正治〕

六八―七六

自由論文コーナー

田中内閣と日中航空協定（下）〔時任英人〕

七七―八九

第一二六三号 一九八九年一・一二月合併号

特集 激動の昭和外交

巻頭言 激動の昭和外交の幕明け〔池井優〕

二―三

第二次欧州大戦と日本陸軍〔波多野澄雄〕

四―一六

- 太平洋戦争末期における日本外務省の対ソ認識〔小澤治子〕
 一七一―三〇
- 日中LT貿易の成立過程―高碓達之助、松村謙三、岡崎嘉平太の果たした役割〔添谷芳秀〕
 三二―四五
- 国際政治における日本の対外援助
- ―サハラ以南アフリカ諸国に対する日本の経済援助と外交政策
- 〔ハリル・T・ダールウィッシュ（小島さくら訳）〕
 四六―八一
- アメリカ中西部における対日イメーजीーノースウエスタン大学の場合
- 〔ローラ・ハイン（五味俊樹訳）〕
 八二―一〇三